



TITLE:

地理教材としての地形圖(第二輯): 四、生駒山附[近]

AUTHOR(S):

槇山

CITATION:

槇山. 地理教材としての地形圖(第二輯): 四、生駒山附[近]. 地球 1930, 14(1): 63-67

ISSUE DATE:

1930-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183780>

RIGHT:

爲り、活動性は亡失するのが常である。人事上の諸現象にも亦頗る是に類するもののあるのを

看過しては爲らぬ。

地理教材としての地形圖

(第二輯)

四、生駒山附近

所要地圖 五萬分一地形圖、大阪東北部、(同奈良參照)

此地形圖の東南には生駒山脈がほぼ南北に走つてをり其東には南北の凹地を隔てて後生駒山脈が低くあり、なほ東には富雄の谷を夾んで丘陵地帯が横はつてゐる。東北部には磐船の山塊があつて其東は傾斜して丘陵群をなし、西は山田村の段丘、川越村の丘陵がある。圖の西北部には斜に淀川が畫かれてあり、右岸には廣い沖積平野があつて千里山の丘陵群が北に續いてゐる。淀川の南には河内北部の廣い沖積平野がある。圖の西南隅には大阪市街の一部がある。

生駒山脈は一の傾斜地である。其西面は急

斜をなして河内平原にのぞむけれども反對の側は比較的緩である。生駒山は六百四十二米にすぎないが河内、大和兩平原の間にあつて著しく目に立つ事は關東の筑波山に似たものがある。岩石も似てゐて閃綠岩よりなつてゐる。試みに地形圖の水平曲線の屈曲の少い部分と大なる部分との界に線を引いて見ると閃綠岩と他の岩石の地質境界にほぼ一致する。生駒山の北方には水平曲線の錯雜した部分がある。之は花崗岩の地域であつて、少し注意して圖を讀むと崩土の符號が散布してゐるのに氣が付く。花崗岩は組織が粒狀で性質の異つた石英、長石、雲母の集合であるから容易に風化される。風化した花崗岩



生駒富雄附近地形圖

は目の荒い砂の粗な堆積に異る事ないので容易に開析せられて惡地(バッドランド)となる。此爲に生じた地形は見事に地形圖に表示されてゐる。けれども生駒山脈の東麓には崩土の符號のない水平曲線の細かく畫かれた地帯がある。此地帯は洪積世の沈積で湖底に出來た泥土や河成の砂、砂利等である。洪積世の地層は恰度花崗岩の東に向いた地面の上に這ひ上る様に沈積してゐる。此は生駒山脈の傾動する前に水平位置に堆積したものが花崗岩の磐と共に動いたものでなければならぬ。地層の傾斜方向は正に傾斜地塊の元の表面の傾動後の傾斜に一致する。此傾斜地塊の面を背

面 (Back slope) と稱する。反對に西側の急斜面は即ち斷層崖であつて地塊の前面といふ。生駒の前面が斷層崖であるといふ事實は地質學上より證明されてはをらないが北西面、即ち磐船山塊の前面が星田村附近に於て斷層崖である事を知るにたる露頭が見出されてある。此斷層崖は弓なりに曲つてをつて生駒前面の崖とは鈍角の水平角をなして交會してゐる。

生駒山自身は前記の如く閃綠岩であつて侵蝕に對する抵抗力が花崗岩よりずっと大きい。であるから地塊が傾動する以前の基磐水平面 (Base level) (又は准平原) の中に孤立した丘、モナドノックをなしてゐたと思はれる。生駒寶山寺の背後にある神聖なる岩は讃岐岩類の緻密な安山岩よりなる。遠望すれば小さい圓錐をなしてゐるが脚下の斜面は崖錐であつて實際の形は小形のトロイデにあらずんば岩頸である。此岩石上には樹木が鬱蒼と繁茂してゐる。同質の火山岩は南北の列をなして生駒山脈上に所々に噴出してゐる事が確かめられた。

後生駒山脈は生駒山脈に比すると一層明瞭に斷層崖が表はされてゐる。此細長い傾斜地塊の前面は地圖上に立派に讀まれる如く北北西—南南東の走向をもつて生駒の背面に對してゐる。脚部には洪積層の低い丘陵がある。洪積層と山脈の岩磐との境には斷層が實在する。しかも洪積層は引き摺られ直立に近い急斜を斷層に沿ふてなしてゐる。かくの如く地質學上に證明せられた斷層崖はあまり多くはない。洪積層の急斜區域は狭い帶をなしてをるので幅は僅かに十米内外にすぎず、其より西方では東に緩く傾き生駒山の背面に相當する。

後生駒山の岩磐は主として片狀の花崗岩であるが堂前以北にて普通の花崗岩に移化する。片狀花崗岩の部は古生層の全く變質して結晶質になつたものが伴はれ其間にリバリチック、インジェクション (Liparitic injection) の模式的なるを見る。花崗岩は雲母の多い片岩の間に層狀に交互に配せられ、時に尖滅し時に横斷し、また時に錯雜する。

かくの如き岩磬の上には洪積層が被さつてゐる。或所では三百米を越す頂上の上にも位置してゐる、傾動の背面は即ち原基磬水平面（基準面）である。此間の消息は生駒山脈の背面と全く同じ事であるがより以上に明確に洪積層の這ひ上る氣合を見るを得る。白谷には洪積層と花崗岩背面の間に狹長な盆地がある。洪積層は此處で小さいケスタを造つてゐる。

富雄川より東に横はる丘陵群は洪積層よりなるものであるがやはり同じやうな傾動を示してゐる。即ち此丘陵群の開析前の處女面を作れば明かに緩く奈良盆地に傾いてゐるが西端は急に富雄川の谷にのぞんでゐる。大阪電軌の富雄驛の東方には此洪積層の構造を知るに都合よろしい切取があつた。此處では大きな斷層はない。軟弱なる厚い洪積層は岩磬の斷層の上位で撓曲をした。富雄に向つては六十度以上の急斜をなすが奈良の方向へは極めて緩い。撓曲の内心部には最下の地層が露出してゐる。此は長石、石英の角ある粒と粘土の混じたもので花崗岩の原

位置に甚近い事を示してゐる。背面の上に生じた谷は必然的に長く東に向ふが前面は非常に短くなつてゐるのも地形の上で自然である。

かくの如く此地圖の西南部には三本の略平行な斷層があるが、此中で東の二本は北に走ると落差小となり終に磐船の花崗岩山地に消失し去る。東には富雄川の谷がある。此は傾動の角に生じた自然の谷であるが實際の沖積平地は稍西に偏してゐる。

生駒川の水は南に流れ磐船川の水は北に流れて分水界は甚しく不分明である。生駒より平條を経て北行する道も南生駒より寺垣内を経て北行する道も沖積平地の上を知らぬ間に磐船川の流域に入るであらう。

磐船川は磐船の峽谷をなして花崗岩地を切つて流れ私市^{キヤ}にて平地に出る。私市から下流は一名天ノ川と稱し河床は周圍の沖積面より高い。此は人工的に氾濫を防ぐ爲に築いたによるでもあらうが花崗岩の砂を多量に流す爲に元來自然の堤防があつたとも思はれる。

川越村水木村の丘陵は洪積層より成り開析を充分に受けてゐる。高さは北に低く六十米、漸次南に高く八十米以上になるが茄子作、寝屋の線に一度落ちて星田、打出の線より再び高くなるが百米に及んで急に花崗山地に接してゐる。此丘陵は古い段丘である。

山田村の段丘は表面が平で僅かに崖端に谷があるばかりで高さも四十米平均にすぎない。之は新しい段丘である。段丘の西端で洪積層は西に可なりに傾斜してゐる。やはり落ち込みを示すものであらう。

河内北部の廣い沖積平野は有史時代まで潟であつた。此中にある地名に水に縁のあるのが可なりある。島の付く地名、江の付く地名の如何に多いかを注意せられたい。

大阪城より南には上町の洪積層段丘がある。

淀川の三角洲は此あたりに始まる。大阪市を中心とする交通網は日本中で一番目の細い所である。東海道線、新京阪線、京阪線、片町線、大軌線は大阪より放射し志貴生駒線、城東線は同

心的に走る。自動車の後れてゐる我國にては道路は進歩しないので交通地理上注意すべき事柄はない。

生駒山は大和への自然の防壁であり三列の傾動前面は西よりの侵入をよく防ぐ事、巴里盆地に於ける第三紀層中生層のケスタとよく似てゐる。神武天皇東征に名高い日下は生駒の西麓にある。

生駒の如く古くより開けた平原に立つ山は古來信仰の中心となつた。枚岡に枚岡神社あり、生駒山中に興法寺あり寶山寺がある。寶山寺は大軌開通と共に參客が急に増加し門前街が發達した。索道は山麓より山頂に通じ遊客は四時絶えず電鐵會社の宣傳により知られなかつた神社佛閣の急に參詣者を増加したるも少くはなくまた運動場遊園地は住宅地と共に開かれつつある

(槇山)